

緩衝帯整備によるイノシシ出没の減少効果

1 背景・目的

いしかわ森林環境基金事業により、集落沿いの森林の見通しを良くするために幅約40mに渡って伐採や藪の刈払い等を行うことで、人と野生動物の生活圏の間に緩衝帯を整備している(図1)。野生動物の出没が問題となっている5集落を対象に、集落に分布するイノシシの痕跡(掘り起こし、ケモノ道など、写真)をルートセンサス法により調査することで、緩衝帯整備の効果を検証する。



写真 イノシシの掘りおこし(左)と足跡(右)

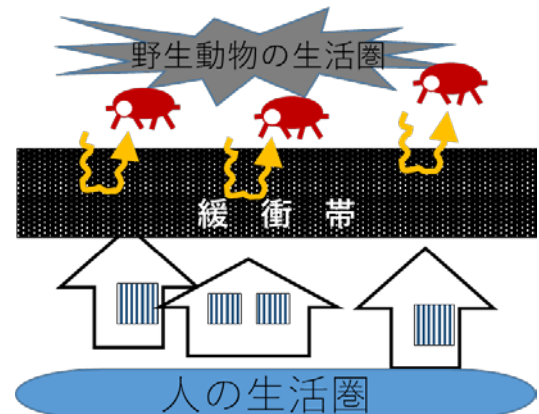


図1 緩衝帯整備のイメージ

2 技術のポイント

- (1) 人と野生動物の生活圏を明確に区別するため、森林に緩衝帯を整備する。
- (2) 整備翌年には、集落内のイノシシの痕跡は著しく減少し、緩衝帯整備が野生動物の出没を抑制したことを示す(図2)。

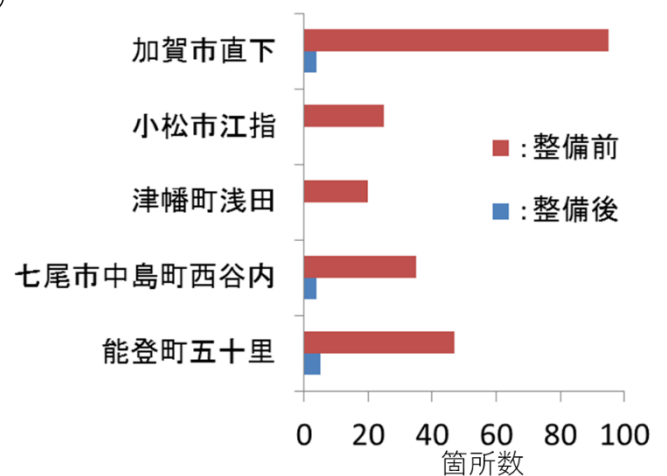


図2 整備前と整備後のイノシシ痕跡数の比較

3 成果の活用と残された問題点

- (1) 痕跡調査を整備後3年程度継続し、緩衝帯整備の効果をさらに検証していく。
- (2) 整備効果を持続させるため、藪の刈払いなどを継続する必要がある。
- (3) イノシシを含む県内の野生動物の分布は拡大しており、恒久的に野生動物被害を減少させるために、捕獲などで個体数密度を低下させる必要がある。

問合先：資源開発部 TEL 076-272-0673
 担当者：江崎功二郎